混じ稱するものにして、今の馭謨郡一島を付言するものにあらず、通證曰、琉球上世與掖玖混同其名、所謂小琉球者、或指益久而言、世法錄海貝亦可證也、按今南島人、七島を指して土噶喇といふがごとし、土噶喇は其七島寶島の名也、掖玖又此方の陸に近き端島、故南島を呼て邪久といえり、當時南島の名稱未備ば也、

〔地理纂考二十四大隅〕馭謨郡　屋久島

鹿兒島ノ南ニ距ル事四十八里、周廻廿五里ナリ、村落十八、栗生村、永田村、吉田村、一湊村、白子村、宮之浦村、船行村、麥生村、小島村、楠川村、尾野間村、平内村、湯泊村、小瀨田村、中間村、安房村、原村、口永良部島村、

高千三百四十五石　平民六千六百八十二人男三千三百十八人女三千三百六十四人　戸數千七十一

〔杜氏通典百八十六邊防〕東夷○中略　琉球

煬帝大業初、海帥何蠻等云、每春秋二時天清氣靜、東向依稀似有煙霧之氣、亦不知幾千里、三年、帝令羽騎尉朱寬、入海求訪異俗、何蠻言之、遂與蠻俱往、因到流求國、言不相通、掠一人、幷取其布甲、而還、時倭國使來朝、見之曰、此夷邪久國人所用也、

〔異稱日本傳上二〕今按、邪久者、唐書所謂邪古、日本書紀所謂掖玖也、字雖異、音通、邪久爲我西南小島、故使者知其布甲、

〔新唐書二百二十東夷列傳〕日本、古倭奴也、○中略　其東海嶼中、又有邪古、波邪、多尼三小王、北距新羅、西北百濟、西南直越州、有絲絮怪惨云、

〔兩朝平壤錄四日本〕西海道近瀕江山少、止養久山居海中、方圓二百餘里、竹中叢茂、多茶笋、又出多羅木、有地都守之、

〔西遊雜記四〕此地○薩摩より屋久の島へ、海上二十里といへども遠し、此間に小島多し、さて屋久の島は、古しへ屋久國と稱せし一國にて、東西九里餘、南北五里、七里、或は二里、或は一里、名產には杉